

西夏語の3種の遠称指示代名詞の使い分けについて

荒川 慎太郎

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

【要旨】 西夏語の遠称の指示代名詞（以下、遠称代名詞）は、先行研究において3種が指摘されているものの、その使い分けについては判然としなかった。文献中、出現頻度の高い順に、A 𐵄¹tha:, B 𐵄²tha:, C 𐵄³tha: とすると、AとBは同一音節で声調が異なり、BとCは同一音節で声調も同じである。

本考察では、遠称代名詞の使用例が多い西夏語仏典を資料とし、A～Cがどのような環境で現れるかを検証した。遠称代名詞に後続する要素に着目し、Aに後続するのは名詞、「～と」、「～に随い」、「～により」などを意味する後置詞、Bに後続するのは「～の、～を」、「～の上」、「～の間」、「～の所」などを意味する後置詞、のような傾向があることを示した。すなわち、A、Bは基本的に相補分布をなし、その使い分けが、それらに後続する要素の語彙的な違いによることを述べた。CについてはA、Bと異なる観点から検討し、先行研究に指摘されない前方照応的な機能を提示した*。

キーワード: 西夏語、西夏文字、指示代名詞（遠称）、（名詞）後置詞、格標識

1. はじめに

西夏語は11～13世紀、中国西北部に存在した西夏国の言語である。現在では死語と化したのが、西夏文字によって記された豊富な文献が残る。言語系統としてはチベット・ビルマ語派に属する。

西夏語は近称、遠称の指示代名詞を持つ。名詞を修飾する場合は、指示代名詞－名詞という語順となる。遠称の指示代名詞（以下、遠称代名詞）は、先行研究において3種が指摘されているものの、その使い分けについては判然としなかった。筆者の統計で、文献中、出現頻度の高い順に、A、B、Cとすると、AとBは同一音節で声調が異なり、BとCは同一音節で声調も同じである¹。全ての文字は、共通す

* 本論文は、日本言語学会第141回大会（2010年11月27日、東北大学）における筆者の報告「西夏語の遠称指示代名詞の使い分けについて」にもとづく。発表の際有益なご意見を頂いた先生方、ならびに詳細なご助言を頂戴した『言語研究』査読者の方々に深くお礼申し上げる。

¹ 『同音』『文海』などの西夏語韻書から明らかになる。荒川（1997: 33）参照。以降、西夏語の推定音表記は荒川（2014）に従う。声調表記（1=平声、2=上声、?=声調不明）は上付き小文字とする。西夏語韻書の韻母番号に言及する場合は西田式表記とする（例えば「平20」=平声20韻）。

西夏語音については研究者ごとに推定音と表記法が異なる場合が多いものの、本稿で扱うA、Bに関しては、声母は「無声有気歯茎破裂音 th-」、韻母の主母音は「広母音 -a」のように見解が一致している（例えば西田（1989: 413r）は thafi（平20）、Gong（2003: 607）は thja²）。本稿は文法を扱う内容であるため、どの研究者の推定音であっても議論には影響がない。このため、先行研究の引用中における音韻表記も、混乱を避けるため荒川の表記に統一する。

る文字要素²は持つものの、異なる字形の西夏文字で記される³。以下に、A, B, C の字形と発音を示す。

文字と発音の関係 A: 𐰪 ¹tha: B: 𐰫 ²tha: C: 𐰬 ²tha:

B と C が同一の発音であるということは、理論的には話し言葉では区別できないことになる。書き言葉、すなわち文献中、文字表記のみの違いで B と C にどのような機能差があったのかという問題も生じる。

本考察では、遠称代名詞の使用例が多い西夏語仏典を資料とし、遠称代名詞 A ~ C がどのような環境で現れるかを検証する。そして、遠称代名詞に後続する要素に着目し、A に後続するのは名詞、「~と」、「~に随い」、「~により」などを意味する後置詞、B に後続するのは「~の、~を」、「~の上」、「~の間」、「~の所」などを意味する後置詞、のような傾向があることを示す。すなわち、A, B の使い分けが後続する要素の語彙的な違いによることを述べる。C については A, B と異なる観点から検討する。

2. 西夏語韻書における記述

議論に先立ち、西夏時代に編纂された韻書『文海』『同音』に残る、当該文字群の簡単な説明、注釈を提示したい。『文海』は本来、各西夏文字の形・音・義、すなわち部首の簡単な分析・反切上下字による発音の説明・字義の説明、が記される有益な資料である。ただし、現存するのは「平声」の声調に属する文字群の部分のみであり、当該の文字では A 𐰪 についてしか残らない。まず、字義を説明した箇所⁴の原文⁴（西夏文字・推定音・グロス。なお「也」の後のスペーシングは筆者による）と訳（（ ）は補足、[] は説明・言い換え）を示す。現代の文法用語で言えば格標識にあたる西夏文字が、自立語のように現れ、意味が取りにくいのが、おおよそ、

𐰪 𐰫 𐰬 𐰭 𐰮 𐰯 𐰰 𐰱 𐰲 𐰳 𐰴 𐰵 𐰶 𐰷 𐰸 𐰹 𐰺 𐰻 𐰼 𐰽 𐰾 𐰿
¹tha: ¹ta: ²wI: ¹II: ²a ¹II: ²do ²tha: ¹II: ¹e: ¹II: ²naq ¹e: ²benq ²ngwu ¹II:
 Dem TM 如き也 CM 也 CM Dem 也 CM 也 語 CM 助 である也
 𐰪とは「(その)ごとき」なり。「(それ)に」なり。「(する)ところ𐰪[それ]」なり。「(それ)の」なり。「語の助 [= 文法語]」であるなり。

² 西夏文字の派生関係と西夏語語彙の派生関係は、もちろん区別されるべきものである。文字要素からは、一見 A, C が B からの派生のようなだが、西夏文字には「減算式」（既存の文字の一部を「減らす」ことにより新しい文字を作る）の造字・派生関係も珍しくないで判断は難しい。本考察ではこれらの文字の派生関係には言及しない。

³ C の字形の、部首要素の左右を交換した𐰪 ¹tha:（現存する西夏語韻書では所屬する声調・韻母が不明であり、サンスクリット対音から ¹tha: のように推定する）という字が存在するものの、これは指示代名詞ではない。サンスクリットの tha の音写に使用される他、𐰪𐰮 ¹tha: ²ne: 「逼迫」という語の前部要素に使用される。この文字については荒川（2002: 142-143）参照。

⁴ 校勘本は史金波他（1983: 185）参照。

のようになる。語義説明からは、西夏語の音韻学者が「文法語であり、B 𐵓と関係がある」と認識していたことが読み取れるものの、A, B の差異は不明である。

次に、『同音』の記載を示す。『同音』は『文海』と異なり、詳細な文字説明を有しない。見出し字の下に1~3字、一回り小さな「注字」が付されるのみである。幸い、『同音』甲種本・乙種本という、まとまって現存する資料中に、当該の文字が見られる⁵。注字1文字は、見出し字の右下にある場合と左下にある場合で、意味合いが異なる。右下にある場合は、「右下の文字→見出し字」の順で複合語、ないし形態素連続となる。左下にある場合は、「見出し字→左下の文字」の順である。次に、原文⁶は縦書きであるが、実際の読み順にしたがって横書きにし、フォントの大小で見出し字と注の関係を示す。逐字訳も挙げる。

A 𐵓 𐵓 それ-に随い

B 𐵓 𐵓 それ-の(を)

C 𐵓 𐵓 ここ-そこ

興味深いのは、甲種本ではA, Bが同一の音(同一小類)としてまとめられ、Cが異なる音としてまとめられる(それでもCの掲載位置はA, Bのすぐ後ろであり、A, BとCは近似すると見做されていたことは間違いない)点である。一方、乙種本及び『文海』では、B, Cが同一音節でAとは声調が異なるとされている。

乙種本は甲種本を修訂したものと見做せる⁷ため、またそこでの分類が『文海』(現代の学者も西夏語の声調の基準とする)と等しいため、筆者も先行研究で認められた声調・韻母番号を踏襲した推定音を示す。すなわちA: 𐵓¹tha:(平20), B: 𐵓²tha:(上17), C: 𐵓²tha:(上17)である。

3. 西夏語の指示代名詞についての記述と本稿に関わる考察

西夏語の指示代名詞体系は、これまで西夏語研究者の関心となることが少なく、後述のКепинг、西田を除けば字書記述の域に留まっていた。近称、遠称の指示代名詞に関する箇所を抽出して引用すれば、例えば次のようなものが挙げられる。

李(1997, 2008)の字書項目では、“𐵓²thI:[5354]「此」、𐵓¹tha:[2019]「其、彼、此」、𐵓²thyu[2173]「此」、𐵓²tha:[0396]「彼、其、它」、𐵓²tha:[0388]「它、其、彼。指示代詞、遠指。借用与第三人称代詞、遠指」”(〔 〕内の数字は『夏漢字典』コード番号)のように述べられる。

Gong(2003: 607)においては、“Demonstrative pronouns; 𐵓²thI: (this), 𐵓²tha: (3rd person, irrespective of animate, inanimate, male or female), 𐵓¹tha: (he, his, him, she, her, it, that), 𐵓²thyu (here), 𐵓²tha: (there)”のように説明される。

⁵ 甲種本校勘本は李範文(1986: 687)参照。

⁶ 甲種本・乙種本の当該箇所は史金波他主編(1997: 8, 36, 38)の図版参照。

⁷ 西夏語の韻書同士の関係は荒川(2009)など参照。

これらの記述から、近称の指示代名詞は使い分けが明らかな2種類である⁸のに対し、遠称代名詞は3種が認められ、3種の使い分けについては判然としないことがわかる。

なお、この他、特定の場合にのみ現れる𐄂¹chI:「それ、その」が指示代名詞として挙げられる。この要素は、出現頻度は高くないが、「その時」などの特定の表現の場合と、動詞語幹と動詞接頭辞の間に現れる場合（「接頭辞⁹ - 𐄂¹chI: - 動詞語幹」のような語順となる）がある。𐄂¹chI:は先行する名詞の目的語を指示して「○○(目的語), それを～する」のような意味になる。この指示代名詞（あるいは指示代名詞的接頭辞）については本稿では扱わない。

Кепинг (1985: 55-57)は、「前方照応」という、他の研究者と異なる観点から指示代名詞を検討した。「B: 𐄂²tha: が純粋な前方照応であるが、A: 𐄂¹tha: もその役割を果たすことがある」ことを示唆するが、二つの差異は明らかではない。本稿にも関係する重要な指摘は、「B: 𐄂²tha: は一般的に後置詞 (послелог) と共に使われる」こと、その後置詞の例として、「𐄂¹e:, 𐄂¹kha, 𐄂²do」を挙げたことである。ただしAが後置詞と共に使われるかどうか、Bについては他の後置詞と共に起るかなどについては言及されない。

一方、西夏語の指示代名詞に関して、機能的な差異に関して言及したのは、西田 (1989, 1997, 2006, 2012) だった。80年代までの先行研究を踏まえ、『言語学大辞典』「西夏語」の項目 (西田 1989: 413r) では、「指示代名詞は、3分法で、近称 𐄂²thI:, 遠称 1 𐄂¹tha:, 遠称 2 𐄂²tha: がある。声調で対立する遠称の2形式が、どのように使い分けられたのか、詳しくは分からない。(中略)場所の代名詞として、𐄂²thyu 「ここ」、𐄂²tha: 「そこ」(上述の指示代名詞と発音は同じであるが、字形が異なる)がある」¹⁰ (西夏文字は筆者が補足) のように説明されていた。

その後、西田 (1996: 34-35) において、疑問代名詞についても、声調が違うだけの同一音節の2語があるという、遠称代名詞と同様の現象があることから、次の表1のような関係が提唱された。

表1 代名詞の声調と格形式の対応

	平声	上声
疑問代名詞	𐄂 ¹ swI:	𐄂 ² swI:
遠称代名詞	𐄂 ¹ tha:	𐄂 ² tha:
機能	主格	属格・斜格

(西田 (2012: 72) 図2 から代名詞部分を抽出し、筆者が「機能」欄を加えた)

⁸ 𐄂²thI:は近称を指示するのにもっとも一般的に使われる。𐄂²thyuは場所に関して使われる。

⁹ この環境で現れる接頭辞は否定または疑問を表わす。用例は西田 (1989: 416r-r) 参照。

¹⁰ また、西田 (1989: 413l-r) は3人称単数の人称代名詞としてB 𐄂²tha: を挙げる。もともとは人称代名詞ではなく、それを「本来、指示代名詞であった」とする。Кепинг (1985: 61) は、B 𐄂²tha: は遠称代名詞ではなく人称代名詞という見解をとる。

西田の考察では、疑問代名詞に関しては格形式の機能差が例を含めて説明されるが、遠称代名詞に関しては十分な説明とは言い難い。例えば、そこでは平声形 𐵑¹tha: と上声形 𐵑²tha: の機能差に関わる最小対が示されていない。

西田(1997: 1339)による見解を引用すれば「遠称指示詞にも平声形 𐵑¹tha: (平20) と上声形 𐵑²tha: (上17) の2形式があることはよく知られており、多く西夏文テキストで、この2形式はほぼ同じ環境において出現する。〈中略〉この両形式も同じく環境による変調ではなく、上声形 𐵑²tha: (上17) は『同音』の注(左)がいみじくも指示しているように、本来は 𐵑¹tha: (平) の属格形を表記したものと考えられる。」(西夏文字は筆者が補足) と述べられる。

前述の、『同音』におけるBの注字(𐵑)は、形態素としてBに後続するものではなく、「属格」としての意味をBに与えるという解釈である。この解釈が正しいとすると、『同音』におけるAの注字(𐵑「〜に随い」)はどのように解釈すべきかが問題になる。本稿ではこの見解に関しても検証したい。

4. 資料と検討方法

本稿の分析で利用した文献について説明する。

西夏語の文献資料のうち現存するものはその大半が仏教文献である。さらにそのほとんどは漢語・チベット語からの翻訳である。漢語・チベット語をかなり逐語的に翻訳した文献、西夏語独自の格標識・接辞類が頻出する文献など様々なので、西夏語の文法研究のために選出する資料には注意を要する。

まず、チベット語から翻訳された西夏語仏典では、チベット語の近・遠称指示代名詞が逐語的に西夏語の近・遠称指示代名詞(遠称はほぼ上述のA)に訳されることが多いため¹¹、そうした仏典は対象資料としない。

一方、漢語から訳された西夏語仏典において、A, B, Cの遠称代名詞が、例えば「彼」「其」の逐語訳とはなっているかどうかを検証すると、表2のようになる。これは漢文『華嚴経』と西夏語訳『華嚴経』の指示代名詞がどのように対応するか、『華嚴経』巻七十七で検証した結果である。西夏語の遠称代名詞が漢文の「彼」「其」の逐語訳ではないこと、時には漢文原文に指示代名詞のない場合も遠称代名詞が現れること、が分かる。

¹¹ チベット語仏典から訳された西夏語仏典の、直訳的な特徴については荒川(2003, 2006)を参照。

表2 漢文の指示代名詞と西夏語の遠称代名詞の対応

	対応漢語	回数	計
𐽄 ¹ tha:	彼	8	19
	其	6	
	—	5	
𐽄 ² tha:	彼	3	8
	其	4	
	—	1	
𐽄 ³ tha:	彼	1	2
	—	1	

※ —は対応する漢語の語彙が無いことを示す。

このため、「翻訳」とはいつても、漢語から訳された西夏語仏典は、西夏語独自の、指示代名詞の使い分けを検討する上で有効な資料といえる。ただし、前述の西田(1997: 1339)にあるように、A, Bがほぼ同じ環境において出現するという資料では、この使い分けが検証できない¹²。

遠称代名詞 A しか出現しない仏典は本稿での考察対象から除外する。例えば『金剛經纂』¹³などである。

次に、遠称代名詞 B も出現するものの、A に比べると出現頻度がわずかであり、本稿で扱うような使い分けが明瞭でない資料も除外する。仏典ではないが、漢語から訳された『類林』という西夏語資料¹⁴では、B は格標識が後続する場合にしか現れず、他は A のみである。筆者による調査結果を示せば次のようになる。

『類林』 41,400 字中 218 字 (A212, B6, C0) (出現率 0.53%)¹⁵

¹² 後述のように、本稿では「A, Bの使い分けがある」文献に関してはある程度結論を示すことができた。しかし、「A, Bの使い分けがない」文献(たとえばどのような環境でも A のみ出現する文献)については、それがない理由を明らかにできなかった。西夏文字の創製は仏典の翻訳に先立つものであり、「西夏文字創製の時代(11世紀初頭)には遠称代名詞の区別が明らかだったので各種の文字が作られたが、通時的に使い分けがなくなっていった。初期に西夏語に翻訳された仏典には使い分けが見られる」のような可能性が考えられるが、証明するのは難しい。翻訳の年代などの視点で調査することは今後の課題としたい。

¹³ 『金剛經纂』とは『金剛經』をもとにした漢文仏法説話の一つ。西夏文テキストは荒川(2014: 409-443)参照。

¹⁴ 『類林』は史金波他(1993)を資料とした。

¹⁵ 『類林』における出現頻度、遠称代名詞と直後の要素の関係も興味深い結果となったので挙げておく。

A: 名詞 127, 𐽄¹byu 「～に随い」36, 𐽄¹e: 「～の、～を」13, 𐽄¹chya: 「～の上」4, 𐽄¹she: 「～により」3, 𐽄²u 「～の中」3, 𐽄²do 「～の所」3, 𐽄²ngu 「～を以て」2, 𐽄²syu 「～の如き」2, 𐽄²rir 「～と」1, 𐽄²a 「～に」1 (この他、「食べる」「聞いた」などの動詞や「のち」「また」などの副詞が後続する例が計 15, 後続要素が代名詞の直後で破損している例が2)

B: 𐽄¹e: 「～の、～を」6

本考察では、まとまった分量があり、遠称代名詞の使用例が多く、A, B, Cの3種が確認できる条件を満たした、以下の仏典¹⁶を資料とする。『法華経』、『金剛経』は遠称代名詞が出現する頻度の高い有用な資料とわかる。略号、文献略称、対象巻数、調査文字総数、遠称代名詞出現総数（内訳）、出現率の順に示す。

SD『法華経』序、巻1,2,3断片,4-8	52,051字中539字 (A438,B97,C4) (出現率1.04%)
AV『華嚴経』巻1-10,36,77	84,596字中526字 (A390,B127,C9) (出現率0.62%)
VP『金剛経』(全)	5,960字中68字 (A61,B6,C1) (出現率1.14%)

5. 遠称代名詞と後続する要素の傾向

上記の資料から、遠称代名詞がどのような環境で現れるかを調査した。遠称代名詞と直後の要素の関係は表3ようになる。数字は三つの経典に出現する回数の和である。「3種の遠称代名詞が出現した数の和」の順に左から右に配する。例の総数が4例以下の場合、遠称代名詞に動詞・副詞が後続する場合は割愛した。

表3 3種の遠称代名詞と後続要素

文字発音	名詞	循 ¹ 'e:	穉 ¹ 'chya:	繼 ¹ 'kha	袞 ² 'rir	穉 ¹ 'byu	穉 ² 'do	穉 ¹ 'she:	穉 ² 'u	穉 ² 'ngu	穉 ¹ 'su
意味		～の、～を	～の上	～の間	～と	～に随い	～の所	～により	～の中	～を以て	～よりも
A 穉 ¹ 'tha:	766	1	1	0	25	20	4	17	0	8	5
B 穉 ² 'tha:	1	70	69	54	0	0	13	0	13	3	0
C 穉 ² 'tha:	5	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0
計	772	71	70	55	25	20	18	17	13	11	5

まず全体の傾向として、Aの出現頻度が非常に高く、Cは極めて珍しい（資料全体でも14例）ことがわかる。また、「Aと名詞」という例が突出して多いことが確認できる。

A, Bに関しては、遠称代名詞に後続する要素が基本的に相補分布をなし、次のような傾向があることがわかる（ほぼ頻度順。次の「」内は荒川（2010: 157-158）にもとづく格標識などの意味）。

A: 名詞, 「～と」, 「～に随い」, 「～により」, 「～を以て」, 「～よりも」

B: 「～の、～を」, 「～の上」, 「～の間」, 「～の所」, 「～の中」

以下に5.1. A 穉¹'tha: と5.2. B 穉²'tha: にわけ、それぞれの後続要素ごとに用例を説明する。ほぼ頻度順に配列する。□は遠称代名詞、下線 は後続する要素である。

¹⁶ 『法華経』は西田(2005), 『華嚴経』は西田(1975, 1976)及び荒川(2011), 『金剛経』は荒川(2014)をデータとした。ちなみにそれぞれ漢訳仏典『妙法蓮華経』(大正 0262), 『大方広仏華嚴経』(大正 0279), 『金剛般若波羅蜜経』(大正 0235)からの翻訳である。

5.1. A 窺 ¹tha: と後続要素の用例

5.1.1. 名詞 (名詞句も含む)

以降, ほぼ頻度順に, 代名詞に後続する要素を検討していく。今回調査した中で, 極めて多数の例が見られたのは「A 窺 ¹tha: + 名詞」という連続である。ここでいう名詞とは, 人称代名詞, 数詞, 動詞に名詞化接辞が付されたものなどを除く, 一般名詞・固有名詞を指す。時に名詞句といえるものも A 窺 ¹tha: に後続する。

- (1) 窺 窺 窺 窺 窺 窺 窺 窺
¹tha: ʔlo: ʔcha: ʔta: ʔlo: ʔcha: ʔtsyer ʔtya:
 Dem 福德 TM 福德 性 ではない
 その福德とは福德の性質ではない。 VP, 20-2 (荒川 2014: テキスト編 232)
- (2) 窺 窺 窺 窺 窺 窺 窺 窺 窺 窺 窺 窺
 ʔcha: ʔwi' ʔzi:q ʔli: ʔcha: ʔje: ʔzi:q ʔmenq ʔnyI' ʔe: ʔle: ʔtha: ʔnyI' ʔrer
 徳 生む 童子 徳 有す 童女 二 CM 見る Dem 二足
 窺 窺 窺
 ʔe: ʔdo ʔtshweu
 CM 礼拝する
 徳を生む童子, 徳を有する童女二人を見て, その二つの足を礼拝し

AV77,001-6 (荒川 2011: 154) 17

一方, B 窺 ²tha: に名詞が後続する例はわずか 1 例¹⁸しか確認できなかった。

- (3) 窺 窺 窺 窺 窺 窺 窺
²tha: ʔe: ʔjyI ʔjye ʔleu ʔtshI: ʔtya:
 Dem 相 転輪 一 また ではない
 その相は転輪で, 一つ(のもの)ではまたない。 AV7, 42-5 (西田 1976: 245)

この一文からみると, 全く説明できない例外である。しかし前後関係に着目すると, 本稿 6. で述べるように C 窺 ²tha: の出現環境と同一, すなわち「七言句 (7 音節の文) の対の後者」に出現していることがわかる。(3) の例を, 前の文と共に示すと (4) のようになる。

- (4) 窺 窺 窺 窺 窺 窺 窺 窺 窺 窺 窺 窺
 ʔte: ʔjo: ʔte: ʔwenq ʔmI: ʔpyuq ʔmI ʔtha: ʔe: ʔjyI ʔjye ʔleu ʔtshI: ʔtya:
 或 長い或 短い 無量 種 Dem 相 転輪 一 また ではない
 或は長く或は短い無量種 その相は転輪で, 一つ(のもの)ではまたない。
 AV7, 42-5 (西田 1976: 245)

¹⁷ 以降, 「出典略号, 巻数, 何頁 (折) 目, 何行目 (校訂テキストにおける出典箇所)」の順で出典を示す。「~」は複数行にまたがる場合である。

¹⁸ 『華嚴經』巻 7 (西田 1976: 245) に見られる。なお「転輪」の訳出に関しては西田 (西田 1976: 246) の注 166 に従った。

おそらくはC 𐵓²tha: を使用するところを、同一声調のB 𐵓²tha: を誤記したものと筆者は考える。C 𐵓²tha: + 名詞の例も5例ほど確認できるが、これは6.で後述する。

いずれにせよ、A 𐵓¹tha: には名詞が後続する。表現を変えれば名詞を修飾する遠称代名詞はA 𐵓¹tha: ということになる。

5.1.2. 𐵓²ri:r 「～と」

次に多数の例が見られたのは「A 𐵓¹tha: + 𐵓²ri:r 「～と」」という連続である。𐵓²ri:r は随伴するものを表わし、「集まる, 出会う」などの動詞の他、「～と同じ, ～に譬える」などの表現にも用いられる¹⁹。B 𐵓²tha: に 𐵓²ri:r 「～と」が後続する例は確認できなかった。

- (5) 𐵓²ri:r 𐵓²ri:r 𐵓²ri:r 𐵓²ri:r 𐵓²ri:r
 𐵓²ri:r²tse: 𐵓¹tsI: 𐵓¹tha: 𐵓²ri:r 𐵓¹a? 𐵓²tyenq
 菩薩 また Dem CM 一 儀
 菩薩もまたそれと同じ²⁰である。 VP, 53-4 (荒川 2014: テキスト編 263)

「A 𐵓¹tha: + 𐵓²ri:r」の連続は『法華経』に頻出し23例を数える。ただし実に19例が例文(5)にみられる𐵓²ri:r𐵓²ri:r 「それと同じ」である。このような特定の表現が数多くカウントされていることは留意する必要がある。それでも同経典においては「～とまみえる」「～と争う」という文にも「A 𐵓¹tha: + 𐵓²ri:r」が確認できる。この連続が一般的であったことは疑いない。

- (6) 𐵓²ri:r 𐵓²ri:r 𐵓²ri:r 𐵓²ri:r 𐵓²ri:r 𐵓²ri:r 𐵓²ri:r 𐵓²ri:r
 𐵓²me: 𐵓¹ta: 𐵓¹man 𐵓¹su: 𐵓¹shI: 𐵓¹li: 𐵓¹tha: 𐵓²ri:r 𐵓¹e: 𐵓²bir 𐵓²na:
 名 TM 文殊師利 Dem CM Pref 会う Suf.2sg
 名は文殊師利, それと(お前は)まみえん。 SD5, 13-6 (西田 2005: 71)

5.1.3. 𐵓¹byu 「～に随い」

資料中かなり多数の例が見られたのは「A 𐵓¹tha: + 𐵓¹byu 「～に随い」」という連続である。𐵓¹byu は何かに随従することを表わし、時に「～により」のように因果関係などを示す。B 𐵓²tha: に 𐵓¹byu 「～に随い」が後続する例は確認できなかった。

- (7) 𐵓¹byu 𐵓¹byu 𐵓¹byu 𐵓¹byu 𐵓¹byu
 𐵓²to 𐵓²ne: 𐵓²lu 𐵓¹byu 𐵓¹ni: 𐵓¹phI:
 悉く王座 捨てる Dem CM 家 捨てる
 悉く王座を捨てて それに随って(=そして)家を捨てる(=出家する)。
 SD1, 036-1~2 (西田 2005: 18)

¹⁹ and に相当するのは別の要素 𐵓¹di:q である (荒川 2014: 172)。

²⁰ 𐵓²ri:r 「～と・一・儀」のような表現で「～と同じ」という意味を表わす。

- (8) 𣪗 𣪘 𣪙 𣪚 𣪛

𣪗 ¹tha: ¹byu ²zi: ²le: ¹phi:

Dem CM 悉く 見る AV

𣪗それに随って(=そして)悉く見させる。

AV6, 62-1 (西田 1976: 211)

5.1.4. 𣪛 ¹she: 「～により」

「A 𣪛 ¹tha: + 𣪛 ¹she: 「～により」」という連続例も少なくない。𣪛 ¹she: は本動詞的な用例（「したがう」）もあり、先行研究では格標識と認められないことが多い。これも、B 𣪛 ²tha: に𣪛 ¹she: 「～により」が後続する例は確認できなかった。

- (9) 𣪛 𣪜 𣪝 𣪞 𣪟 𣪠 𣪡 𣪢 𣪣 𣪤 𣪥 𣪦 𣪧 𣪨

²me: ²yu ¹tha ²qiy ¹mi: ¹tha ²me: 𣪡 ¹she: ²bu ¹pyuq ¹bi:

名 常に 仏 音 聞く 仏 名 Dem CM 勝 威 光

名は「常に仏音を聞く」（といい）、仏名は「それによる(=自然)勝威光²¹」

(という)。

AV9, 45-1~2 (西田 1976: 327)

理由・因果関係を表わす点では5.1.3. 「A 𣪛 ¹tha: + 𣪛 ¹byu 「～に随い」」に近い表現である。同一資料で「A 𣪛 ¹tha: + 𣪛 ¹byu」と「A 𣪛 ¹tha: + 𣪛 ¹she:」とが混在する場合もある（例えば『法華経』では「A 𣪛 ¹tha: + 𣪛 ¹byu」14例と「A 𣪛 ¹tha: + 𣪛 ¹she:」12例）。この二つの表現の差は明瞭ではない。

5.1.5. 𣪛 ²ngu 「～を以て」

「A 𣪛 ¹tha: + 𣪛 ²ngu 「～を以て」」という連続例は8例（『金剛経』7例・『華嚴経』1例）、B 𣪛 ²tha: に𣪛 ²ngu 「～を以て」が後続する例は3例（全て『法華経』）確認できる。5.1.4. までのような明瞭な分布ではないものの、𣪛 ²ngu 「～を以て」は傾向としてはA 𣪛 ¹tha: に後続する。

- (10) 𣪛 𣪜 𣪝 𣪞 𣪟 𣪠 𣪡 𣪢 𣪣 𣪤 𣪥 𣪦 𣪧 𣪨

¹sha:q ²zi:q' ¹je: ¹sI 𣪡 ²ngu ¹zi: ¹mi:'

七 宝 ある 満ちる Dem CM 布施する

七宝があつて満ちていて、それを以て布施するならば、

VP, 19-6 (荒川 2014: テキスト編 232)

- (11) 𣪛 𣪜 𣪝 𣪞 𣪟 𣪠 𣪡 𣪢 𣪣 𣪤 𣪥 𣪦 𣪧 𣪨

²so ¹pho ¹ryur ²kyeq ¹zenq ¹chyu 𣪡 ²ngu ¹tha ¹'e: ¹kyuq ¹tsweu

娑婆 世界 幾ばくある Dem CM 仏 CM 供養する

娑婆世界が幾ばくかあり、それを以て仏を供養する。

SD7, 51-6~52-1 (西田 2005: 178)

²¹ 対応する漢文は「自然勝威光」であり、西田（1976: 328）では𣪛 ¹she: 「それに順う = 自然」のように𣪛 ¹she: を本動詞句的に解釈している。

『金剛經』・『華嚴經』には「B 𐰃²tha: + 𐰃²ngu」という例はなく、『法華經』には「A 𐰃¹tha: + 𐰃²ngu」の例はない。つまり各資料中での用法は一貫しているといえる。𐰃²nguに先行する遠称代名詞については、今後他の西夏語仏典でも検証する必要がある。

5.1.6. 𐰃¹su「～よりも」(比較)

遠称代名詞に𐰃¹su「～よりも」が後続する例はわずか5例しか採取できなかったが、それは全て「A 𐰃¹tha: + 𐰃¹su「～よりも」」という連続であり、B 𐰃²tha:に後続する例はなかった。

- (12) 𐰃¹ngwI 𐰃²khI: 𐰃¹miq 𐰃¹i: 𐰃¹shyo 𐰃¹shyo 𐰃²myeqr' 𐰃¹tha: 𐰃¹su 𐰃²ryeqr
 五 万 沙 数 導く 導く 者 Dem CM 多い
 五万(恒河)沙数を導く 導く者はそれより多い。

SD5, 105-4 (西田 2005: 94)

5.2. B 𐰃²tha: と後続要素の用例

5.2.1. 𐰃¹e:「～の, ～を(～に)」

B 𐰃²tha: と後続要素の用例で最も多く、全体でも「A 𐰃¹tha: と名詞」に次いで多いのが「B 𐰃²tha: + 𐰃¹e:「～の, ～を(～に)」」である。

この格標識 𐰃¹e: は出現環境により、属格、対格、与格など複数の機能²²を持つといわれる。今回調査した資料でも各種が確認できた。「B 𐰃²tha: + 𐰃¹e:」それぞれの例(属格(13)、対格(14)、与格(15))を挙げる。

- (13) 𐰃²no 𐰃²ryeqr 𐰃¹ny'e: 𐰃¹ku 𐰃²tha: 𐰃¹e: 𐰃²cha: 𐰃¹o"
 安 楽 住する 即ち Dem CM 功德
 安楽に住すれば即ち それの功德(は)

SD5, 64-3 (西田 2005: 83)

- (14) 𐰃²shI: 𐰃¹ka: 𐰃²mo 𐰃²ni: 𐰃¹tha 𐰃²tha: 𐰃¹e: 𐰃¹kI: 𐰃¹la
 釈迦牟尼 仏 Dem CM Pref 記す
 釈迦牟尼仏はそれを記した。

SD5, 110-5 (西田 2005: 95)

- (15) 𐰃²tha: 𐰃¹e: 𐰃¹tsyer 𐰃²tsyer 𐰃¹qye 𐰃²tse: 𐰃¹phi:
 Dem CM 法 性 真 悟る AV
 𐰃²tha:に法性が真(である)と悟らしめる。

AV5, 034-6 (西田 1975: 163)

「A 𐰃¹tha: + 𐰃¹e:」という例は1例と少なく、しかも『法華經』巻一の冒頭部(「妙

²² 荒川 (2010: 160-161, 168) を参照。

法蓮華經序品第一」に続く4行目)にのみ見られる。次の、明らかに属格的用法の
 循¹e:「～の」が出現する文である。

- (16) 絆 翫 翫 肱 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎
¹ne: ¹e: ²dzyu ²ri:r [tha: 1e: ²me: ¹ta: ¹a? ²jya ¹keu: ¹chyin ¹zyu
 心 自 主 得 得 得 Dem CM 名 TM 阿若橋陳如
 心に自主(=自在)を得る、循の名とは阿若橋陳如…

SD1, 2-3 (西田 2005: 10)

この例外に関しても、筆者の見解を述べたい。この「A 𠄎¹tha: + 循¹e:」の例は
 同経典を通じて初出の「遠称代名詞 + 循¹e:」の例であり、これら以降出現する連
 続全てが「B 𠄎²tha: + 循¹e:」である。最初の例は翻訳者の誤りであり、それ以降
 正しく「B 𠄎²tha: + 循¹e:」で訳されたと筆者は考える。

この例外一つがあるものの、「B 𠄎²tha: + 循¹e:」が一般的といえよう。

5.2.2. 𠄎¹chya: 「～の上」

次に多数の例が見られたのは「B 𠄎²tha: + 𠄎¹chya:「～の上」」という連続である。
 A 𠄎¹tha: に 𠄎¹chya:「～の上」が後続する例は1例(例文19)しか確認できなかった。

- (17) 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎
²rer ¹seu: ¹jwa: ¹no" ²lu ¹lyu ²wI: ²yer [tha: 1chya: ²wI: ²dzu'
 足 洗う AV のち 座 席 Pref 伸ばす Dem CM Pref 座る
 足を洗い終わり、のちまた、座席を敷いて、その上に座った。

VP, 07-6 (荒川 2014: テキスト編 220)

- (18) 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎
²me: ²cha: ¹ka ¹ny'e: [tha: 1chya: ¹zi:q' ¹lwoq2 ¹wyeqr ¹lenq ²sho: ²tshenq
 名 平 等 住む Dem CM 宝 炎 盛る 増す 莊嚴
 名は「平等に住する」といい、その上に宝の炎が燃え盛る(ような)莊
 嚴…

AV8, 2-5 (西田 1976: 269)

- (19) 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎
²me: ²mI ²mI ¹zi:q' ²sho: ²tshenq ²to ¹wi' [tha: 1chya: ¹se ¹bi: ¹sweu
 名 種 種 宝 莊嚴 出生 Dem CM 淨 光 照る
 名は種種宝莊嚴出生²³(といい)、その上に淨光が照っている…

AV8, 2-6 (西田 1976: 269)

『華嚴經』ではこの例外を除いて全て「B 𠄎²tha: + 𠄎¹chya:」の形である。また
 例文(19)の前後の行には、例文(18)のような類似する構文が登場するものの、
 これらも全て「B 𠄎²tha: + 𠄎¹chya:」の形である。誤訳や誤記では無いとしたら、
 筆者にはこの例外が説明できない。

²³ 西田(1976: 238注19)では「種種宝莊嚴を出生する」と動詞句的に解釈される。

5.2.3. 繡¹kha「～の間」

5.2.2. に次ぐ数の例が見られたのは「B 鞞²tha: + 繡¹kha「～の間」」という連続である。繡¹kha と 5.2.4. で扱う 𠵹²u との機能差は明瞭ではない。荒川 (2010: 162-163) では暫定的に、𠵹²u は「一定の範囲を持ち、個々に分割できない」事物を意味する名詞に後続、繡¹kha は「分割可能なものの集合」に後続する、と推定されている。

- (20) 繡¹kha 鞞²tha: 𠵹²u 𠵹²u
²me: '1ta: ²tha ²sho: ²tshenq 𠵹²tha: 𠵹¹kha ²waq ²tha ¹du: ²ryen ¹gI: ²we:
 名 TM 大 莊嚴 Dem CM 広い 大きい 樓閣 一つ ある
 名は大莊嚴 (であり)、その間に一つ広大な樓閣があり、
 AV77,005-5 (荒川 2011: 158)

- (21) 𠵹²u 𠵹²u 𠵹²u 𠵹²u 𠵹²u
¹tsyer ²ngo:r ²ngo:r ¹nga ²ngwu 𠵹²tha: 𠵹¹kha ²no ¹ny'e:'
 法 一切 空 である Dem CM 安住する
 法一切は空である。その間に安住し、 SD4,076-4 (西田 2005: 62)

C 鞞²tha: に 繡¹kha「～の間」が後続する 1 例は 6. (例文 30) で述べる。

5.2.4. 𠵹²u「～の中」

5.2.4. 以降は例数が少なくなる。5.2.4. 「B 鞞²tha: + 𠵹²u「～の中」」、5.2.5. 「B 鞞²tha: + 𠵹²do「～の所」」は共に 13 例が収集できた。5.2.3. と関連するため、前者から記述する。

「B 鞞²tha: + 𠵹²u「～の中」」13 例に対して、「A 𠵹¹tha: + 𠵹²u「～の中」」の連続はみられず、「B 鞞²tha: + 𠵹²u「～の中」」が一般的と言える。

- (22) 𠵹²u 𠵹²u 𠵹²u 𠵹²u 𠵹²u 𠵹²u 𠵹²u 𠵹²u 𠵹²u
²thI: ²zi:q' ²bI ²du: ²dwi:q' ¹khyu ¹a? ²to ¹no" ¹tshI: 𠵹²tha: ²u ²mI
 Dem 宝 塔 廟 地 下 Pref 出る 後 また Dem CM 音声
 龍 綬 綬
²qyiq ²to ¹II:
 出る 也

この宝塔廟が地下 (から) 出て後また、その中に音声が出る。

SD4,088-3~4 (西田 2005: 65)

- (23) 𠵹²u 𠵹²u 𠵹²u 𠵹²u 𠵹²u <…> 𠵹²u 𠵹²u 𠵹²u 𠵹²u 𠵹²tha: ²u
²yyan ²tse: ¹ryur ¹ryur ¹wi' ¹lhe? <…> ¹ju ²ne' ²kyaq ¹no" 𠵹²tha: ²u
 菩薩 所々 生 受ける 顯示する 欲する 故 Dem CM
 𠵹²u
²no ¹ny'e:'
 安住する

菩薩が所々に生を受け〈中略〉顕示せんと欲する故に、その中に安住し、

AV77,008-2~3 (荒川 2011: 160)

(23) は上掲 (21) と同一の動詞「安住する」の例にも関わらず、ここでは格標識として 𑖀²u「～の中」が使われる。𑖀¹kha と 𑖀²u との差異は依然として不明だが、「B 𑖀²tha: + 𑖀¹kha」「B 𑖀²tha: + 𑖀²u」も組み合わせとしてはどちらも一般的であると言えよう。

5.2.5. 𑖀²do「～の所」

𑖀²do「～の所」は上記二つと同様の場所格を示す。「B 𑖀²tha: と 𑖀²do「～の所」」13 例に対して、「A 𑖀¹tha: + 𑖀²do「～の所」」の連続も 4 例確認できたが、全体の傾向としては前者の連続が多いと認められる。

- (24) 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀
 1'tsyer 1'kyuq 2'myeqr' 1'dyu 1'zenq 2'nga 1'nI: 𑖀²tha: 𑖀²do 1'shI:
 法 求める 者 ある 時 我等 Dem CM 行く
 法を求める者がある時 我等は彼の所に行く。 SD5,044-2 (西田 2005: 78)

- (25) 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀
 1'dyIr 2'gwi: 2'do 2'nI: 1'tshe: 1'twuq 1'kI: 2'dyen 𑖀²tha: 𑖀²do 1'ryur 1'kha 2'dzwo: 1'mI
 四 句 頌 等 説く 所 必ず Dem CM 世 間 人 天
 四句頌等を説く所は必ず、その所に世間の人、天…

VP,29-6~30-1 (荒川 2014: テキスト編 241)

(24), (25) はともに「遠称代名詞 + 𑖀²do」の形式であるものの、前者の有生物(人)と後者の無生物に対して、異なる遠称代名詞が使われている。前述の Gong (2003: 607) では指示代名詞に有生・無生の区別が無いように記述されるが、これらの区別は留意する必要がある。

5.3. 小結

A は名詞を修飾する例が 9 割以上であり、それ以外は主に随伴・付帯を含意する後置詞(格標識と見なすか疑問の残る 𑖀¹she:「～により」を含むため、遠称代名詞に後続するこれら文法要素の総称を「(名詞)後置詞」と呼ぶ)に限られる。一方、B は名詞を修飾する例がほとんど見られず、ほぼ全て後置詞(𑖀¹e: 以外では主に場所を示す後置詞)と共に用いられていることがわかる。

ここで 2., 3. で触れた、『同音』に記載される A, B の注字の意味することについて再考したい。

A 𑖀¹𑖀¹ それ-に随い

B 𑖀¹𑖀¹ それ-(を)

西田によるBの注字 𐵑 'e:に関する解釈に対し、筆者は、「この注字はBに後続する代表的な後置詞である」と提案する。今回の統計でも、B 𐵑²tha:に後続する例で最も多いのが𐵑 'e:「～の、～を(～に)」であるのは偶然とは言えまい。一方、Aの注字 𐵑¹byu「～に随い」に目を転じれば、これもAに後続する頻度がきわめて高く(今回の統計では名詞を除くと二番目に高い頻度)、代表的な要素と見なせるためである。

すなわち『同音』の注字は、「遠称代名詞A, Bに後続しやすい文法語(後置詞)の中で代表的なもの」と解するのが妥当かと思われる。

6. 出現頻度の低い遠称代名詞Cについて

C 𐵑²tha:は、先行研究において場所「そこ」を示すと記述されることがある。

- (26) 𐵑 𐵑²tha: 𐵑¹ny'e:
 'lyuq 'di: 'ny'e:
 身 分ける Dem 住する
 身を分け、そこに住する。 西田(1977:131)

- (27) 𐵑²tha: 𐵑¹chya: 'mi: 'pyuq 'rI:r 'wi:
 Dem CM 宮殿 Pref 作る
その上に宮殿を作った。 西田(1964:164)

しかし、今回調査した文献中では、CはA, Bに比べ極めて例数が少なく、後続する要素にも一定の傾向が確認できない。名詞が後続するほか、場所を示す後置詞が続く例も見られる。つまり後続する要素からみる限り、A, Bのような使い分けの差異が見出せないのである。

さらに、調査で得られた例文からC 𐵑²tha:が「場所を示す」とはみさせない例を示す²⁴。

- (28) 𐵑 𐵑¹po 'tsa 'ma 'ngaq 'tsa 'jyan 'tse: 'ngo:r 'ngo:r 'e: 'ji? 'tse: 'dar <…>
 Dem 菩薩 摩訶薩 菩薩 一切 CM 行 通達する

²⁴ 漢文『金剛經』に頌文を挟んだ『金剛經頌』という仏典があり、これも西夏語に訳されている。西夏語訳『金剛經頌』中の頌文の部分では、「誰彼」という表現においてCが現れるため、人称代名詞の用法も確認できる(荒川2014:387)。ただし、漢字「誰」を「難」と読み間違えた故の誤訳がある一文であるから、全幅の信頼が置ける訳出とは言い難い。「彼」を訳出する際も、本来のBを誤った可能性も否定できない。

𐵑 𐵑¹tsyer 'kha *'ngyi ('swI:) 𐵑²tha: 'me:
 法 問 難 (誰) Dem ない
 法の間に*難(誰)彼なし (金剛經頌, 093-2 (荒川2014:テキスト編387))

𪛗 𪛗

²rar ¹wI'

調伏する

彼の菩薩摩訶薩は菩薩一切の行に通達し、〈中略〉調伏する。

𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 〈…〉

²tha: ²ijan²tse: ¹shi: ¹po ¹lo ²mi:¹ngo:r ²ngo:r ¹onq 〈…〉

Dem 菩薩 初め 波羅蜜 一切 全て

𪛗の菩薩は初めに波羅蜜一切全てを〈後略〉

AV77, 009-2~4 (荒川 2011: 161)

- (29) 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗
¹ryur ¹tha ¹tsI: ²le: ¹no" ²tha: ¹ryur ¹tha ²rI:r ¹tshe:' ²ldwI:r ²ryeqr ¹tsI: ¹mi:
 諸 仏 また 見る のち Dem 諸 仏 Pref 説く 經典 また 聞く
 諸仏をまた見る。のち、𪛗の諸仏の説いた經典をまた聞く。

SD1, 014-2 (西田 2005: 13)

例文 (28, 29) は、下線 の名詞と C に注目すると、「名詞…遠称代名詞 C + 照応する同一 (乃至同じ意味) の名詞」という表現になっていることがわかる。

一方、『華嚴經』においては、七言句の対の句に見られること、場所、人物など、先の句に「照応する名詞 (名詞句)」(以下の例ではその主要部を下線で示す) が存在すること、が顕著に見られる。

場所と照応すると思われる例

- (30) 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗
¹sha: ²ryeq² ¹ryur ²lhe? ¹onq ²ngo:r ²ngo:r ²tha: ¹kha ²tha ²sho: ²tshenq
 十 方 諸 国 土 一切, Dem 間 大 莊嚴
 𪛗 𪛗
¹dyu ¹dyu
 所有する
 十方諸国土一切, 𪛗間に大莊嚴を所有す AV7, 59-4 (西田 1976: 253)

- (31) 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗
¹tha ²lyuq ²ngo:r ²ngo:r ²lhe? ¹dyu ¹dyu ²to ²zi: ²lyuq ²sha: ²ngu ²tha: ¹shI:
 仏 身 一切 国 所有する 皆 悉く 身 現す CM Dem 往く
 仏身一切は国を所有し 皆悉く身を現すのを以て𪛗に往く

AV7, 15-4 (西田 1976: 231)

人物と照応すると思われる例

- (32) 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗
¹i: ¹wi' ²ngo:r ²ngo:r ²zi: ¹kha ¹ny'e:' ²tha: ¹mi: ¹tsI: ¹la: ¹mi: ¹tsI: ¹shI:
 衆生 一切 悉く 間 住する Dem Neg また 来る Neg また 往く

衆生一切，悉く（毛孔の）間に住し 𐵓はまた来ず，また往かず

AV2, 44-5 ~ 6 (西田 1975: 50)

- (33) 𐵓 𐵓 𐵓 𐵓 𐵓 𐵓 𐵓 𐵓 𐵓 𐵓 𐵓 𐵓 𐵓 𐵓 𐵓
²kyur ²kyeq ²waq ²tha ¹na ²jye ²dzwo: ²tha: ²thI: ¹tsyer ¹mi: ²di ²lyenq ¹sho
 志 欲 広 大 深 信 人 Dem Dem 法 聞く 歡喜 起こす
 志欲が広大，深信の人 𐵓はこの法を聞き，歡喜を起こす

AV7, 29-5 (西田 1976: 239)

本考察で集めた例から見る限り，遠称代名詞 C は，1) 「ある名詞…遠称代名詞 C + その名詞」，あるいは 2) 対句において，「前の句に場所・人物，後ろの句に遠称代名詞 C」，という環境で現れ，前方照応として機能すると結論づけられる。ただし十分な数の用例とは言えないため，今後も引き続き遠称代名詞 C が現れる例文を集め，検討したい。

7. まとめ

本考察では，遠称代名詞の使用例が多い西夏語仏典を資料とし，遠称代名詞 A ~ C がどのような環境で現れるかを検証した。

その結果，遠称代名詞に後続する要素に，A：名詞，「～と」，「～に随い」，「～により」などを意味する後置詞，B：「～の，～を」，「～の上」，「～の間」，「～の所」などを意味する後置詞，のような傾向があることがわかった。A は名詞を修飾する場合が多く，後置詞が続く場合も，随伴・付帯を含意するものにほぼ限られる。一方 B は，ほとんど全て後置詞が後続していた。ゆえに本考察では，A, B は基本的に相補分布をなし，その使い分けが，後続する要素の語彙的な違いによるものと結論付けた。B については，𐵓¹e: が後続する場合を除いて，「場所を示す遠称代名詞」すなわち「そこ」と見なせる場合が多いことのみ指摘する。

C は今回の調査範囲では非常に例数が少ないものの，場所「そこ」とみなせない例があった。A, B とは異なり後続する要素にも特定の傾向が見られなかった。本考察では，先行研究に指摘されない前方照応的な機能，すなわち，「ある名詞…遠称代名詞 C + その名詞」，または対句における「前の句に場所・人物，後ろの句に遠称代名詞 C」，という環境で現れ，前方照応として機能するものと認めた。この遠称代名詞 C の機能に関してはさらに用例を集め，今後の課題としたい。

グロス略号

AV: 助動詞，CM: 格標識，Dem: 指示代名詞，Pref: 動詞接頭辞，Suf.2sg: 2 人称代名詞接尾辞，TM: 主題標識，Neg: 否定接頭辞

西夏語文献出典と略称（出現箇所はおおむね参考文献内の表記に従った）

AV 『華嚴經』：大方広仏華嚴經典（西田 1975, 1976, 荒川 2011）

- SD『法華経』：妙法蓮華経典（西田 2005）
 VP『金剛経』：金剛般若波羅蜜多経典（荒川 2014）
 金剛経纂：金剛般若波羅蜜多経典纂（荒川 2014）
 金剛経頌：金剛般若波羅蜜多経典頌（荒川 2014）

参 照 文 献

- 荒川慎太郎（1997）「西夏語通韻字典」『言語学研究』16: 1-151.
 荒川慎太郎（2002）「『書評論文』史金波・中嶋幹起・大塚秀明・今井健二・高橋まり代編著『電脳処理《文海宝韻》研究』」『言語研究』121: 131-150.
 荒川慎太郎（2003）「国立民族学博物館所蔵中西コレクションの西夏文—『聖勝慧彼岸到功德宝集頌』断片について—」『内陸アジア言語の研究』18: 1-16.
 荒川慎太郎（2006）「ロシア所蔵西夏文『大千国守護吉祥頌』断片の研究—東方学研究所サントクト・ペテルブルグ支所蔵文書 Tang. 477, No. 7100 について—」『ユーラシア諸言語の研究：庄垣内正弘先生退任記念論集』：63-80. 京都：「ユーラシア諸言語の研究」刊行会.
 荒川慎太郎（2009）「西夏語音復元のための各種資料」『歴史と地理』第 629 号（世界史の研究 221）：27-35. 東京：山川出版社.
 荒川慎太郎（2010）「西夏語の格標識について」澤田英夫（編）『チベット=ビルマ系言語の文法現象 1：格とその周辺』：153-174. 東京（府中）：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
 荒川慎太郎（2011）「プリンストン大学所蔵西夏文華嚴経卷七十七訳注」*Journal of Asian and African Studies* 81: 147-305.
 荒川慎太郎（2014）『西夏文金剛経の研究』京都：松香堂.
 Gong Hwang-Cherng（龔 煌城）（2003）Tangut. In: G. Thurgood and R. J. LaPolla (eds.) *The Sino-Tibetan languages*, 602-620. London: Routledge.
 Кепинг, Ксения Борисовна（1985）*Тангутский язык. Морфология*. Москва: Наука.
 李範文（1986）『同音研究』銀川：寧夏人民出版社.
 李範文（1997）『夏漢字典』北京：中国社会科学出版社（増補修正本 2008）.
 西田龍雄（1964）『西夏語の研究』I. 東京：座右宝刊行会.
 西田龍雄（1975-77）『西夏文華嚴経』I-III. 京都：京都大学文学部.
 西田龍雄（1989）「西夏語」亀井孝他（編）『言語学大辞典 第 2 卷 世界言語編（中）』：408-429. 東京：三省堂.
 西田龍雄（1996）「死言語の復元と表意文字の解説—西夏語と西夏文字の特性」『月刊言語』1996 年 8 月号：18-27.
 西田龍雄（1997）「西夏文字新考」『東方学会創立五十周年記念東方学論集』：1348-1335. 東京：財団法人東方学会.
 西田龍雄（2005）『ロシア科学アカデミー東洋学研究所サントクトペテルブルク支所蔵西夏文「妙法蓮華経」写真版（鳩摩羅什訳対照）』東京：創価学会.
 西田龍雄（2006）「西夏語研究と法華経 IV」『東洋学術研究』45-2: 247-208.
 西田龍雄（2012）『西夏語研究新論』京都：松香堂.
 史金波・白濱・黄振華（1983）『文海研究』北京：中国社会科学出版社.
 史金波・黄振華・聶鴻音（1993）『類林研究』銀川：寧夏人民出版社.
 史金波・魏同賢・Evgeeny Ivanovich 克恰諾夫主編（1997）『俄藏黑水城文獻』7（本卷主編史金波・Evgeeny Ivanovich 克恰諾夫）上海：上海古籍出版社.

※本稿では、文字鏡研究会の許可を得て「今昔文字鏡」西夏文字フォントを使用している。

執筆者連絡先： [受領日 2015 年 1 月 19 日]
 〒 183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 最終原稿受理日 2015 年 9 月 8 日]
 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 715 号室
 e-mail: arakawa@aa.tufs.ac.jp

Abstract

On the Usages of Three Tangut ‘Distal’ Demonstrative Pronouns

SHINTARO ARAKAWA

Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies

Tangut has three demonstrative pronouns for ‘that’: A) 𐰽 ¹*tba*.; B) 𐰽 ²*tba*.; and C) 𐰽 ²*tba*.. A and B are distinguished in Tangut script by different characters and in speech by different tones. B and C are pronounced the same but distinguished by different characters. Thus far, no previous work has presented the criteria speakers use to decide which of the three demonstrative pronouns to use in a certain context.

In this study, the distributions of the demonstrative pronouns are investigated in some Buddhist texts, and the following tendencies are revealed: A is followed by nouns, ²*ri:r* ‘with,’ ¹*byu* ‘cause,’ ¹*she* ‘cause,’ ²*ngu* ‘with, by,’ and so on, whereas B is followed by ¹*e* ‘of, to,’ ¹*chya* ‘over,’ ¹*kba* ‘between,’ ²*u* ‘in,’ and so on.

In conclusion, A and B basically demonstrate complementary distribution: most instances of A precede nouns (including noun phrases), while the remainder are followed by one of the postpositions meaning ‘accompanying.’ In contrast, the instances of B are followed by one of the postpositions meaning ‘of, to’ or are related to some locative meaning.

Furthermore, it is suggested that C functions as an anaphor when used in certain environments, although there are insufficient examples to confirm this hypothesis.